

どうなる・どうする あなたの町村【3】

「離島」における高校教育の可能性

— 離島が日本の明日を拓く — 講演録

2018年3月24日(土) 15時～17時10分

沖縄県市町村 自治会館2階会議室

共催 学校法人桜美林学園

一般財団法人地球共生ゆいまーる



どうなる・どうするあなたの町村【3】

## 『離島』における高校教育の可能性

— 離島が日本の明日を拓く—

### 式次第

14:30 開場

15:00 開会

15:00～15:15 ご挨拶  
島袋秀幸 伊江村村長

### 講演

15:15～16:00 「離島におけるICT教育の可能性」  
能登靖 沖縄総合事務局局長

16:00～16:45 「桜美林中学校・高等学校の  
UNESCO School としての国際理解(ESD)教育  
—ICTを利用した離島教育の未来」  
大越孝 桜美林中学校・高等学校校長

16:45 質疑応答

17:00 閉会の辞  
名護宏雄 (一財)地球共生ゆいまーる理事

17:10 閉会

## ◆講演者紹介



能登靖(の と やすし)

内閣府 沖縄総合事務局 事務局長

京都大学理学部卒業。昭和63年通商産業省入省。平成9年ジョンスホプキンス大学大学院留学。平成14年(独)日本貿易保険営業第一部アジア大洋州中東グループ長、農林水産省技術会議事務局研究調整官などを経て、平成22年内閣府大臣官房総務課調整官併任政策統括官(沖縄政策担当)付参事官。平成24年沖縄総合事務局経済産業部長を経て、平成28年6月より現職。



大越孝(おおこし たかし)

桜美林中学校・高等学校 校長

桜美林大学卒業。米国Rocky Mountain College卒業。1991年桜美林大学文学部英語英米文学科教授。97年同大学院国際学研究科教授。2002年副学長。2013年より桜美林学園常務理事、現職。現在、私立大学協会委員長、文科省高等教育局委員、(一財)地球共生ゆいまーる評議員などを務める。著書に『ことば・ジェンダー』(青磁書房)、『あの人とこんな話』(朝日新聞)他多数。

## 地域創生シリーズ

### ●どうなる・どうするあなたの町村 沖縄から地方創生を考える

2016年3月16日 於:自治会館

主催:一般財団法人地球共生ゆいまーる

後援:沖縄県町村会

～地方創生は国が主体であるが、地域創生は各地域の歴史、自然、文化、伝統を活かし、地域が主体的に行うことが重要である。

### ●どうなる・どうするあなたの町村【2】「離島」から地域創生を考える

2016年11月29日 於:自治会館

主催:沖縄県離島振興協議会・一般財団法人地球共生ゆいまーる

後援:桜美林大学・沖縄県町村会

～地域創生・地域振興において、離島に焦点をあてた。あわせて教育という視点を加え、「離島高等学校」設立の問題提起を行う。

### ●どうなる・どうするあなたの町村【3】「離島」における高校教育の可能性

—離島が日本の明日を拓く—

～具体的にどうするのが本講演会のテーマである。

プロフィールは、2018年3月講演会開催時点

開会

ご挨拶

島袋秀幸

伊江村村長



【司会】ただいまより、「どうなる・どうするあなたの町村【3】 『離島』における高校教育の可能性  
—離島が日本の明日を拓く—」を開始いたします。本日は年度末の大変お忙しい中、多数お集まりいただきありがとうございます。

本日司会を担当致します、一般財団法人地球共生ゆいまーる理事浦崎直良と申します。本講演会は、学校法人桜美林学園と当財団の共催となり、2016年より行ってきた地域創生のシリーズの3回目となります。講演に先立ちまして、島袋秀幸伊江村長よりご挨拶を頂戴いたします。

【島袋村長】 皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました、伊江村長の島袋でございます。本日は、まずは、「『離島』における高校教育の可能性—離島が日本の明日を拓く—」の開催、開会を心からお喜びを申し上げます。本来、私は、開会の挨拶という部分で承っておりますが、せっかくだから、伊江島のこと、あるいは伊江島の教育について述べたほうがいいじゃないですかということ、橋本理事長からお話がありまして、若干、伊江村のこれまでの教育について、少し述べさせていただければなというふうに思っております。

挨拶は、沖縄県の町村会の副会長である新垣邦男北中城村長が述べる予定ではありましたが、所用によって本日出席ができませんので、その辺も含めましてご挨拶をさせていただければなと

思っております。

本日の講演は、能登沖縄総合事務局長によります、「離島におけるICT教育の可能性」、大越孝桜美林中学校・高等学校校長によります、「桜美林中学校・高等学校のUNESCO Schoolとしての国際理解・E S D教育、ICTを利用した教育教育の未来について」の講演を、この後して頂く予定であります。先ほども申し上げましたとおり、挨拶ということになっていきますから、少し伊江村の教育についてお話しをさせていただきます。

皆さん、ほとんどの出席者が沖縄の方ですから、伊江島は、何といつても、伊江島タッチューと、昔はジーマミ、落花生ですね。最近は、ゆりを題材とした「ゆり祭り」に、3万人もの多くの皆さんに来ていただき、島の活性化にご協力をいただきました。改めて御礼を申し上げます。思います。そういう中で、第一次産業でずっと村づくりをしてきた伊江村でございます。

今日、山城克己元観光協会会長もいらつしやっていますが、彼が先導して、伊江村で日本でも先駆的に始めた民家体験泊事業が近年は非常に好評です。本土から、関東や関西から年間5万人ほどの中学生、高校生を受け入れて、島の活性化、あるいは、観光の大きな起爆剤となっているところであります。

そういうことで、関東、関西から、約5万人―島の人口の10倍になりますかね。伊江村の人口

は5,000人弱ですから、1年の中で伊江島に観光で来られるわけですが、いかんせん島には高校はございません。

村が始まつて以来、高校はありません。皆さんがご存じのとおり、15の島立ち、15の旅立ちという教育が沖縄にはありますが、その教育を実践している島で一番人口が多くて、児童生徒の数も多い島となっております。現在、本島の30校以上の高校に、129名の高校生が就学をしております、勉学やスポーツに一生懸命取り組んでいるところであります。

そういう中で、保護者へのアンケート等を行いますと、大体、1人当たり1カ月8万円から12万円の生活費、あるいは授業料の仕送りをしているという現状であります。その辺の部分で平均を取りまして月10万円を仕送りするとなると、129名ですから、1カ月で1,290万。そして、総額として、1年で考えると、1億<sup>5,480</sup>万ぐらいの教育費の負担、保護者の負担があるということを、まず理解をして頂きたいと思えます。

離島である上に高校がないということで、離島の隔離性というのは、教育と医療でございますが、そういう中でも教育の負担が大きいというような離島苦があるということでございます。

平成24年度に文科省の離島高校修学支援事業が始まりました、現在、その129名で大体<sup>3,000</sup>万ぐらいの国の2分の1の補助を受けて、月1人当たり2万円を支給する国の制度がありました、



非常に保護者の負担軽減につながり大変に喜ばれています。国の支援、県も4分の1は持ちますが、それと、村が4分の1ということで、離島の高校生についても国の支援がだんだん手厚くなつてきている状況であります。

村では、高校からは島から出て本島で学校、高等教育を受けるといのが当たり前になっているところでもあります。そういう中でも、私が申し上げたとおり非常に負担が重いという中で、過去に伊江村でも県立高校の誘致の動きがありました。同時期には伊良部高校が創設され現在にいたつているわけですが。本村においては、それもいろんな理由でできませんでした。そして、平成22年に、今あります伊江島空港を活用した航空学園、要するに、航空高等学校の誘致もありましたが、それも非常に莫大な予算と、あるいは多くの労力を要するというところで、実現には至っていない状況でございます。

本村は、今、小学校が2つあります。伊江小学校の前身である伊江島小学校というのが、1880年、明治12年になりますかね、沖縄県で最初の小学校として創立をされた、非常に教育熱心な村であります。先人たちは、人材をもつて資源となすということで、人材育成に力を入れてきた島でもあります。そういう島でも高校はなかなか設立して存続をできない、そういう状況になっております。ですので、私たちは、ずっと高校からは島から出て、本島で高校進学、子どもたちを進学、

就学させるということを思っております。

これからご講演いただくとありますが、最近のICTの進展によりまして、私たちに夢や期待が持てるような時代の到来を私は感じております。そういう中で、離島活性化事業で、今現在、与那国町で実証実験を行っております遠隔授業、琉球大学と内閣府の離島活性化事業による、3年に亘るICTを活用した遠隔授業が行われております。その成果を踏まえて、私は、高校がない離島がすべからくこのICTで結んで、通信制高等学校の設立によって、伊江島から出て本島に高校進学したい人はそういうことでもやるし、島で豊かな自然、あるいは両親と一緒にいながら、島にいて高校の受験、ICTを活用して島でもしつかりとした高校教育を受けて、高校卒業ができる、そういうような環境ができる、そういう時代が到来をしたということ、ほんとにうれしい思いもありますし、また大きな期待を寄せているところでもあります。私も、伊江村としても、一つの町村として、一生懸命その実現に向けて取り組んでいければなというふうに思っているところでもあります。

私が言いたいのは、現状の離島の高校生が、高校進学は本島に行かなければならないという中で、選択肢、いろいろな選択肢が広がっていくという、子どもたちの未来における高等教育の選択肢を広げる一つの手段として、このICTの進展による、高校がない離島をICTで結んだ通信制の高校を早急に設立して頂いて、豊かな自然、人情の中で高等学校教育が受けられるような、そういうよう

な教育環境の形成、提供できるような時代を早めに構築していただきたいと思います。これは当然、高校がない離島の町村だけでは実現できませんから、当然、国の支援、あるいは県の支援、そして、今日、この講演会を開催していただきました、学校関係や、そして財団法人、そして、本日お集まりの皆さん、多くの皆さんの協力をなくしてはできないという部分とっております。そういう意味では、本日のこの講演会は、今後のICTを活用した離島における高校教育について多くの助言、あるいは示唆を与えて頂けるものだと思っております。また、お互いにICTを使った今後の離島教育、あるいは高校教育についての共通認識を持って、皆さんが離島における教育環境の格差是正に向けて、一致して支援を頂ける、そういうような講演会にして頂ければ、本当にありがとうございます、幸いに思っているところであります。

最後になりますが、本日も講演をいただきます能登靖さま、あるいは大越孝さまに、心から御礼を申し上げますとともに、本日のこの講演会を開催して頂きました桜美林学園、そして地球共生ゆいまーる財団に、心から御礼を申し上げます、ICT技術を活用することで、明日を担う離島の子どもたちが世界で活躍できる人材になりますことに期待を申し上げますながら、なおかつ皆さんの今後のご支援を心からお願いを申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございます。

